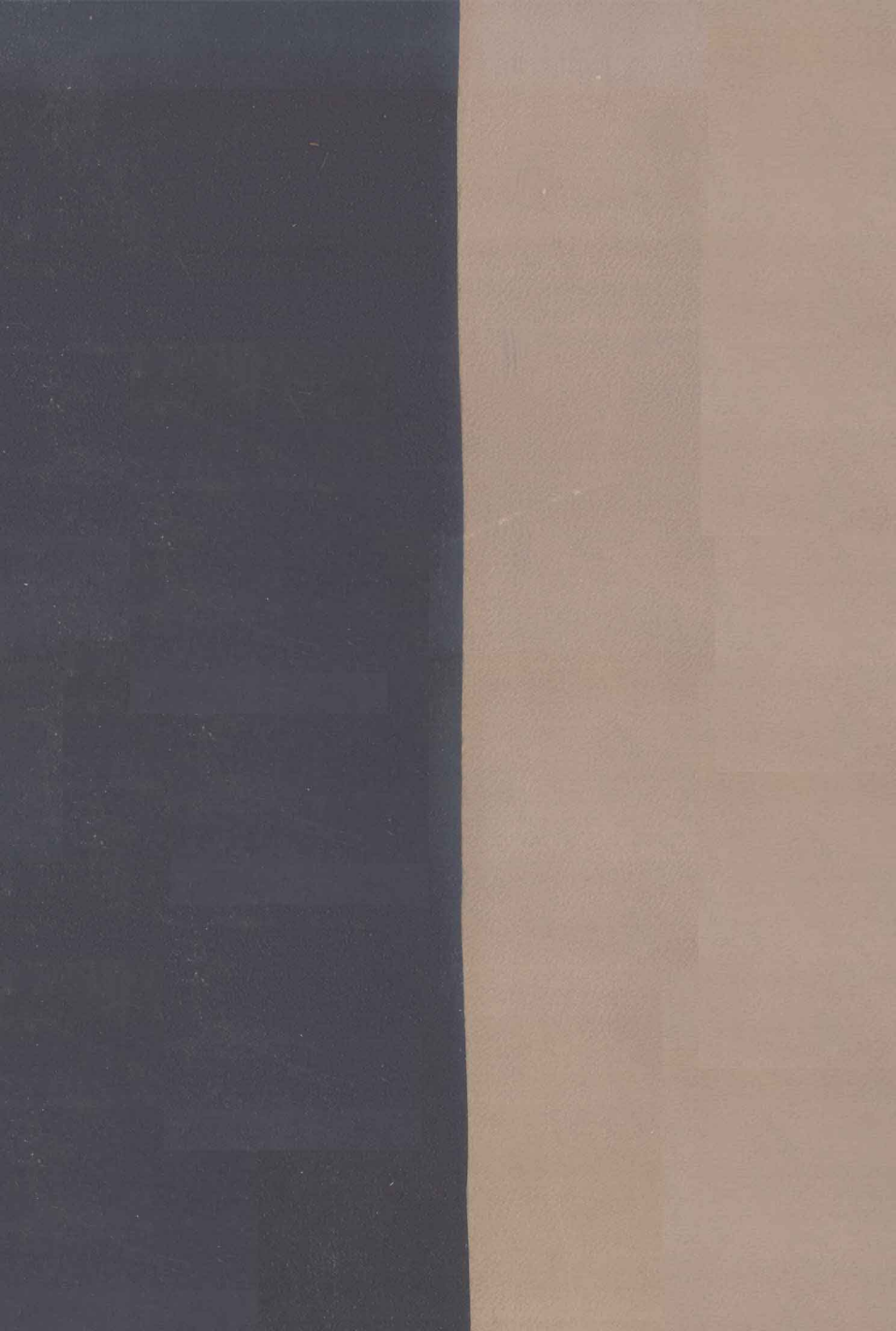
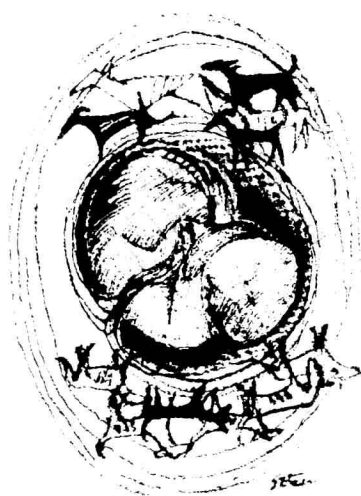




日常生活の冒険
大江健三郎



文藝春秋新社版

日常生活の冒険

昭和三十九年四月三十日 発行

定価 三九〇円

著者 大江健三郎

発行者 上林 吾郎

発行所 文藝春秋新社

東京都中央区銀座西八の四

乱丁落丁のものは
お取り換えします

印刷・大日本印刷

製本・大口製本

© by K. Ōe

Printed in Japan

日常生活の冒険

装幀・カット
朝倉 攝

第一部

1



あなたは、時には喧嘩もしたとはいえ結局、永いあいだ心にかけてきたかけがえない友人が、火星の一共和国かと思えるほど遠い、見しらぬ場所で、確たる理由もない不意の自殺をしたという手紙をうけとったときの辛さを空想してみたことがありませんか？ 小さい獣どもの世界なら、たとえば巨きい獣に、自分の硬い頭をやわらかい蜜菓子かなにかのようにかじられる体験といった苛酷な体験があるかもしれないが、人間の世界では、こ

れがもつとも辛い体験だと、いまのぼくは思っている。それというのも、ぼくの年少の友、斎木犀吉が、北アフリカの独立したばかりのひとつの国の地方都市ブージで、ホテルの浴室のシャワーの蛇口からつるしたベルトで首を吊って死んでしまったという短い手紙を、パリ経由でうけとったところだからだ。

手紙の発信人はイタリア国籍の中年婦人M・Mだ。ぼくは一年前に彼女と犀吉が羽田空港をドイツの飛行機で発つのを見おくった。手紙によると、仕事のために外出して通信社関係の英国人と会っていたM・Mが、屋敷にホテルに電話したとき、犀吉はふだんと変らなかつた。ベッドの上で坐禅をくみ、ひとつのモラルについて瞑想（めいそう）しているということだった。夕暮に、二度目の電話をかけると応答がない。M・Mがいそいで帰ってきたときには、カピリア人のボオイと警官が死体を浴室から運びだすところだった。彼女は死んだ斎木犀吉を形式的に確認するひましかなかった。このイタリア婦人は金満家の未亡人で、犀吉は彼女の世界一周旅行にさそわれて同行していたのである。そのイタリア婦人が、犀吉をホテルに残して、いったいどんな仕事のために外出していた、と

いうのか、まずぼくにはわからない。ほかにわからないことだらけだ。しかし、ともかく、ぼくの友、齋木犀吉はブージーという異国の地方都市で若死にってしまったのである。ブージーには、ほかに日本人などひとりもいなかったにちがいないのだが、これでもうまったく一人もいなくなってしまうのだ。かれはいつたい、どのような土地に、どのような様式で葬られたのだろう。M・Mは、悲しみにうちひしがれてはいるものの、このまま通信社関係の人物と旅行をつづけると書いてよこしている。齋木犀吉のブージーでの死について、ぼくはもうこれ以上のことを知ることができないだろう。かれが北アフリカのホテルのベッドに坐つての坐禪というのとは全くに意味があるわけではない、あのイタリア婦人にとっては、日本人が坐りさえすれば、それが坐禪なのだ（もっとも、この一年間の旅行生活において、齋木犀吉が禪の研究をはじめていなかったというのをあかしだてて証拠もないが）。かれの短い生涯の最後にどのようなモラルをめぐるって瞑想したか、ということさえ、ぼくは決して知ることができないのだ。

モラルといえは、齋木犀吉は、ぼくらの時代の若い日

本人にはめずらしく、すなわち、一九三五年から四十年にかけて生れた日本人にはめずらしく、つねに根本的なモラルについて瞑想している青年だった。かれはいつも、人間はなぜ生きるのか、とか、性欲、勇気、誠実、憐憫などという言葉の本当の意味はなにか、とかいうようなことを考えていたので、他人どもには、ウスノロあつかいされることがあった。かれが大学にはいったかと思えばいつのまにか退学し、就職したかと思えばたちまち失職するという、いかにも当世風の出世主義とは逆の迂遠な生き方をしていたのも、かれの瞑想のために、教室や事務所あるいは守衛室（ここには犀吉も百日ちかく我慢していたが。といってもそれは深夜だけのパート・タイム制夜警である）が決してふさわしい場所ではなかったからである。いわばかれは遠磨（とる磨）のようにモラルの追求のために俗世間をなげうつたのだ。ともかくかれが当時、九十歳だったぼくの祖父の心をとらえたのは、この瞑想癖によつてだった。ぼくの祖父と齋木犀吉はじめて会つて数日間、かれらの類の中へ入れておけばタマゴ一個ずつ半熟になったにちがいない熱烈きで、かずかずのモラルについて話しあい、たちまち七十年の年齢差をのり

こえて肝胆あいてらす間柄となった。ぼくの祖父は、そ

のときまだ十八歳だった齋木犀吉について、あの少年こそは生れつゝの哲学者だ、哲学者とは元来、空を見あげながら夜道をおるいてマジホールにおちるほどの瞑想家のことなんだから、といつていたものだ。ぼくが、この古めかしい比喩を笑うと、明治のはじめに思つた小児喘息のなごりを一世紀ちかくもちたえてきた祖父は、その生涯の数十万回めの咳をゴホゴホやりながら、涙腺の調整がふいにきかなくなるほど昂奮し、いや、こういう萬話こそ、その小ざかしいモラルづけと別に自然主義のリアリズムで真実をかたっているのだ。マンホールの底の哲学者こそ畏敬すべき人間なのだ、あの哲学少年がカントもショオペンハウエルも読んでいないにしても、ひとつの哲学的命題について、あのように瞑想し、あのように話しつづけることができる、ということは、それは生れながらの哲学者の素質をみにつけていることだ、というような意味のことをいい、富山の売薬袋からとりだしたピストル丸をのんで寝てしまった。これ以上、ぼくの反論をききたくないのと、廿世紀後半の哲学的瞑想少年との対話以来、数十年ぶりの知的疲労を感じて怒り

つづくなつていたためだろう。

この祖父が老衰死したとき、齋木犀吉は何日も眼を泣き腫らしていた。もし、いま祖父が生きていたとして、ぼくが哲学少年の自殺をしらせたら、祖父もおいおい泣きはじめ、ついには小児喘息の生涯最大の発作をおこして死んでしまったにちがいない。実際には、ぼくの祖父はかれがずいぶんまえから創つてきた老犬、南洲号（それはぼくの記憶にあるかぎりつねに老いばれた牡犬だった）が肺ジストマで死んだことから力をおとして老衰死したのであるが。

もっともいまのぼくには、齋木犀吉は廿世紀後半の哲学的瞑想家という形容にはおさまりきらないところもある人物として思いだされる。かれは哲学的瞑想を日々の習慣のひとつにしていたが、かれの日々の習慣はほかにも数かずあり、それらのなかになかなる哲学者のイメージにもふさわしくない習慣もあった。かれは老人や動物にたいして優しい少年だったので、ぼくの祖父とその犬のまえでは、つねに自分についてつくられた善良なイメージの囲いのなかにみずからとびこんでいた。しかし、かれには哲学者的な素質とおなじくらい、犯罪者的な素

質もあつたのだ。かれは常習的な裏切り者だったし、病的な嘘つきで、弱い肉体にたいしては直接に暴力をふるい、強い肉体にたいしては煽動や中傷のテコを利用して攻撃をくりかえした。ぼくがかれのブリージーでの突然の死を他殺ではないかと疑ったりはしないのも、齋木犀吉には、他人におめおめ殺されるような脆さなどまったくなかったからである。かれのことを嫌っている連中のあいだでは、かれがある殺人事件に関係がある、という噂さえあつたほどだ。ぼくは順をおつてそれについても書くつもりだし、かれのもっと様々の悪徳についても書くだろう。しかし、かれの美徳についてこそぼくは叫びたいほどの切実さで書きたいのだ。

そこで、齋木犀吉についての、もっともぼくのイメージにびつたりした表現はといえば、ぼくはこんな風に、北アフリカの地方都市ブリージー（それは、今、地図をさがしてみると、アフリカ大陸の北海岸、アルジェと、フイリッブ・ヴィユのちょうど中間にある。齋木犀吉とイタリア婦人とは船で地中海をわたつてそこへ行ったのだらうか、それともローマーアルジェ間を飛行機で、それからカビリア地方へはおそらくヨーロッパ系人種と日本

人のための一等客室などベン・ベラが廃止したにちがいない、汽車で、独立をかちとつて意気軒昂のアラブ人たちのあいだにはさまれて旅行したのだらうか？）のあるホテルで首を吊つて死んでしまつた青年のことを呼びたいのである、すなわち、齋木犀吉は冒険家だったと。それも、ぼくらがおよそ冒険的でない日常生活をいとなんでいるこの日々の現実世界のなかで、いかにも自由に冒険することのできた青年だったと。そのあげく、齋木犀吉は日常生活の圏外、まさに冒険的な世界でのかれ独自の冒険をもとめて、金満家のイタリア中年婦人M・Mとヨーロッパへ出発し、おそらくは数かずの冒険をへて北アフリカの地方都市でシャワールの金属の蓮の茎に紐をかけ、首を吊つて死んでしまつたのだが、出発前、この日常生活のなかで、かれはすでに、らくらくと最高記録をだすことのできた冒険ゲームの選手だった。

そしてぼく自身、この年少の友、齋木犀吉のコーチで、日常生活のグラウンドでの、さまざまな冒険を体験できたのであつた。そこでぼくが書こうとしているのは、齋木犀吉とぼくが体験した日常生活のリアリスチックな冒険と、かれがその瞑想的な調子で話してくれた、かれの

ファンタスティクな冒険とについてである。

いま、日常生活の冒険という言葉をつかいながら、ぼくは過去と未来とを吹きぬける自分の内部の風洞に耳をおしつけて、嵐の近づいた夜更けぼくの生れた谷間のケヤキの梢がたてる音のように、ひとつの遠方からの声がかたかりかけるのを聞く思いだ。それはぼくと齋木犀吉のぼくらの生涯の三度目の出会いの夜、かれがウイスキーに酔って、ぼくに話した、日常生活の冒険についてのかれの意見である。かれの語り口になじんでおいてもらうために、そのまま書きつければ、齋木犀吉はいつもこういう風に話した。その夜もウイスキーを生でそいだ大きいタンブラーを曲芸のアザラシのようにまじめにまっすぐささえて、絨毯に寝そべり、眼をつむり、赤んぼうなしで子守歌をうたっている若い母親のように自分自身に微笑して。もともと齋木犀吉の微笑は、徹頭徹尾、かれ自身のためのものだった、情人に接吻しているときにも、かれは自分自身のために微笑したのだった。

「きみは原色動物大図鑑の哺乳綱篇を読んでみたことがあるかい？ それこそ、おれたちの問題のための重要なヒントを印刷した本のひとつなんだなあ、きみは不勉強

だから、鳥綱篇のきれいな図版くらいしか見ていないだろうねえ」と、その時、廿二歳だった齋木犀吉が、結婚式を一箇月後の廿五歳の誕生日にひかえていたぼくにいったのだった。「哺乳綱といってもトナカイとかオオジカとかいうのじゃないんだ、ヘソイノシシとかクロサイとかいうのでもない。図版の色のおもしろさでは、フクロネズミすなわち、バージニアン・オポッサムなんか人間の胎児みたいで刺激的だから、ちょっと見ておくのいいね。しかし、おれはとくにカイネコのところを読んでもらいたいんだ。そこに、こう書いてあるよ、ネコはイヌのごとくそれを使用する目的が異なるらないので構成的相違の品種が少ない。廿世紀後半の人間は、生きる目的が異なるないので構成的相違の品種が少ない、というふうにこの文章は活用できる。廿世紀人間はたれもかれも核爆弾で殺されるというその目的が異なるないので構成的相違の品種が少ない、というわけなんだよ。そこで、おれは、自分の能力をフルに發揮して、自分だけでも他のホモ・サビエンスとは構成的相違のある別品種になりたいんだよ。一般に廿世紀後半のホモ・サビエンスは、冒険の味のうしなわれた衛生無害のリヴィング・キッチ

ンのゴキブリみたいな日常生活をたのしんでいる。A・D百年には生後十日で死んだやつが、もし癪にやられなければいまでは七十年も生きのびるんだ。しかし、おれは自分流に、この日常生活の世界を冒険的に生きようとしている、そして廿世紀後半の日常生活における冒険家という、構成的相違のある別品種になるんだ。おれが、きみをコーチして一緒に冒険させてやるよ。きみは結婚など計画して、もう危機一髪のところまで冒険家の資格をうしなおうとしていたんだからなあー」

もっとも結婚はしたけれども、このようにしてぼくは、齋木犀吉とともに日常生活の大陸への冒険旅行を開始したのである。最初にぼくは、友人をどこか見知らぬ国でうしなうことが人間にとって最も辛い体験だといった。それ以後、その死んだ友人は自分とともに生きはじめる。たとえばいま、ぼくの耳に齋木犀吉の声がひびいているように。車から降りようとして、他人とすれちがおうとして、別れの挨拶をしようとして、なにか特別の料理を食べようとして、ぼくは自分が齋木犀吉と一緒に生きているのを感じる。ぼくが電話に應對しているとき、自転車走っているとき、性交しているとき、齋木犀吉が、

ぼくの肉体においてそれをおこなっているように感じられる。ゴッホがアルルからだした弟あての手紙に次のような詩が書きこまれていることをごぞんじでしよう。それは仲の悪かったモーヴという親戚の死を悼んでの詩だ。

死者を死せりと思うなかれ

生者のあらん限り

死者は生きん 死者は生きん

ぼくは、この詩を齋木犀吉におしえられたのだった。かれは芸術家の仕事にたいしてセンチメンタルな偏愛をしめしたりする青年ではなかったが、ゴッホの《花咲ける木》という絵については特別だった。アルルの涙ぐましい初春の空のもと、雪の残っている畑の一本のハタンキョウの木に花が咲きにおっている。この絵にはモーヴの思い出という言葉が書きつけてあるのだが、そのモーヴ、従姉の夫の死にあたって画家は短い詩を書いた手紙と一緒にこの絵をその未亡人におくったのだ。齋木犀吉はかれのアパートの壁にこの絵の複製をかけていた。ヨイロツバへ発つまえに、かれはアルルにも行ってみるつもりだといっていたが、かれは花咲いたハタンキョウの

木を見ただろうか？ 死者を死せりと思うことが、不可能な場合がある、そのようなとき、生者のあらん限り、死者は生きん、死者は生きん……

2

ナセルが戦争をしていた年の冬、東京の大学の二年生だったぼくと、関西の私立高校の三年生だった斎木犀吉が初めて出会ったのだった。かれの顔をひとめ見た瞬間、かれの頬にも顎にも一本の鬚も生えていないことに、なんとなく胸をつかれたことをおぼえている。それというのも、ぼくらはスエズ戦争への義勇兵たちの集会に出席していたのだったからだ。このとき、哲学的な瞑想少年、斎木犀吉は、ぼくの九十歳の祖父を魅惑しつつし、祖父に、ぼくと犀吉が羊毛会社の貨物船に乗りこんでスエズに向うための旅費を提供させたのだった。スエズ戦争にあたってナセルの軍隊に参加しにゆくというのは、いうまでもなく政治的大冒険だった、そして、ぼくの家系における政治的冒険の意味を知っている者なら、ぼくの祖父にこの資金を寄附させた十八歳の少年の手腕に感服するだろう。

ぼくの家系には時どき政治狂があらわれ、そしてみんな結局は不満足な大冒険のあとたいいてい三十歳にみたないで死んでしまった。したがってぼくの家系の生き残りたちの、政治狂への批判の眼は鋭く、にがい限りだ。明治以後の、わが家の最初の政治狂は、大伯父^{おおふじ}だった。ぼくの祖父と大伯父が、ごく幼ない兄弟だったころ、かれら二人の父親は、九州の小藩の下級武士で、明治維新の直後、厄介ばらいとでもいうのだろう、藩主からいくらかの資金をさげわたされ、家財道具を車につみこむと、遠く東北の曠野まで開墾に出発した。かれらの父が疲労困憊^{こわへい}して若死にした後、かれらにはいくらかの拓^{たく}かれた土地が残されていたが、それはいつのまにか、旧宿場の機業家をかねる素封^{そほう}家の地主たちに吸収されてしまつて、かれらは単なる小っぼけな小作農にすぎない自分たちを発見したのである。そして若い野望家の大伯父は、単身アメリカ大陸へわたり、カリフォルニアの葡萄畑で働いていたという風のたよりをのこして、あの広大な国のどこかへ永遠に消えさつてしまった。おそらくは若い不平家の日系移民としてむなしく死んでしまったのだろう。そこで、ぼくの祖父は、その兄の冒険について考えてみ

たあげく、また、自分が突然変異的に農民タイプとして生れてきてはいないということにも思っていた、この日本中を放浪しながら人生の真実を求めた。その結果、かれは四国の山奥の谷間で、それをさがしあてたのかどうかは不明だが結婚しておちつき、ぼくの父を生んだのである。

さて、その大伯父は、かれ自身がまだ廿歳にも満たない若さだった一八八九年二月十一日の憲法発布のさいに、狂気のように有頂天になり、開拓地のあぜ道を駆けまわって、ひとりぼっちで、新日本を祝福した。その時すでにぼくの祖父はこの政治狂の兄に自分の運命をたくすことは危険すぎると理解したので、やがては大統領にもなれるかもしれないなどと吹きたてる政治狂の兄とアメリカへともに旅だつたことをこわった。そこで九十歳をこえて生きのびたぼくの祖父のつねにくりかえしのべるモラルは、ぼくの家系では政治的人間は生れながらにして危険の重荷を背おっており、長生きすることがむづかしいということなのだ。それでも大伯父に流れた政治的人間の血は、その後ぼくの父にふたたび顕らかとなった。ぼくの父の生涯は、いわば中国大陸と四国の谷間とのフ

リコ運動で、かれは、大陸では政治行動をおこない、谷間に戻ってくるとその妻を妊娠させるほかなにもしなかった。そして結局、ぼくの父は、張作霖が爆死して十週間に釜山から本土にいたる連絡船のデッキで、自分の頭に弾丸をうちこみ、寛大ないい方をするなら、政治的人間の死をとげた。ぼくは子供のとき、この錆びついて大きいリボルバーの弾倉をぐるぐる廻しては戦争ごっこにはげんだものだ。

こういうわけで、ぼくの家系では、政治的人間あるいは冒険家とは、デキゾコナイという意味だ。しかし思つてみれば、ぼくの家系で、デキゾコナイのほかに、いかなるヒーローもでたことはない。したがって、政治的人間でないおかげで、冒険と死とをまぬがれた、祖父をはじめとする廿世紀後半の生残りの一族郎党には、ぼくらの家系の不幸なデキゾコナイたちに、心の奥底で畏怖の念をいだいているところがある。

そこで、ぼくは自分が大学の友人たちとともにスエズ戦争への義勇軍の会にはいったことを、祖父にうちあけることについては、いくらか心配はしたもののとくに深い懸念をいだいていないのではなかった。祖父は一

瞬、信ずべかざらる突発事にでくわしたという態度をしめし九十年間の修練によるオトボケの驚愕の声を発しはするだろう。しかし、かれは自分の家系の怪物的な種子がここにひとつまた開花したのだということを納得して、黙認するほかないだろう、ぼくはこういうふうなタカをくくっていたのだった。それに九十歳の老人は、ぼくについてなど、すでに深刻な興味をよせてはいなかった。

かれのいかにも明治日本人タイプ**の**ばかりでかい才槌頭**に**はいくらか霞がかかっているような気配があった。それは祖父の忠僕、駄犬の牡の南洲号（なぜ西郷隆盛の号をかりてきているかという、祖父はいつのまにか、自分が西南戦争に参加すべくしてしなかった人間だというふうに思いこむようになっていたからだ。サルトルの小説にでてるヨーロッパの知識人とマドリッドとの関係을思いだしていただきたい。もし、この幻想がいくらかでも真実に根ざしているとすれば、わが家系の常識派の大立者、祖父にも、冒險家の血が稚ない血管に熱を發して流れた時期があったことになる。しかし計算してみると、西南戦争のとき祖父はまだ、ほんの小学生の年齢だ。結局、西南戦争は、ぼくの九十歳の祖父のマドリッドだっ

たのにちがいない）が寄る年波にはかてず、祖父のラッタの靴下をはいた蹠をネズミだと思ひこみいつも思ひだしたように弱よわしい唸り声をあげては咬んでいたのと照応している。もつとも南洲号の歯はすっかり脱けおちていたので、祖父は犬の歯茎によつてしか咬みつかれることがなかった。そしてそれを犬がぶざけて嘗めていたのだと誤解していた。

しかし、ただひとつの問題だったのは、ぼくが祖父にカイロ―横浜間の最低の費用、五万円をだしてもらわなければならぬ、ということだった。ぼくの大学では、そのころ、学生たちのあいだに too much という言葉が流行していたが、祖父にスエズ戦争ゆきを認めさせるのはいいにしても、その旅費までおぐということとは、それこそ too much だった。ぼくの大伯父のアメリカ移民のときにしても、大伯父が祖父にアメリカへわたるための旅費を貸すように、といったとしたら、祖父は常識派、反・冒險派の消極的抵抗をこころみて、すなわちボケットのなかで巾着を握りしめたまま、決してその拳をもつときれいな空気にさらしてみようとはせず、頭をふつたにちがいない。そしてカリフォルニア―ニューヨーク間

の行きだおれ日本人が一人減ったはずであった。ぼくの場合にしても、祖父は、その数多い孫のひとりだが、突然狂気のようになって、一枚の新聞切りぬきをもって駆けこんできたときの応対の仕方は心えていたと思う。切りぬきというのは、エジプトのサイド地方の火力発電所の建物に蟻のように数しれない農民がよじのぼって横たわっているところをうつした写真だ。このアラブの農民たちは砂袋のかわりに自分のアラブ的瘦せっぽちの肉体で、敵の飛行機の機銃掃射から火力発電所をまろうという心意気なのである。

そこで、この酷たらしくも勇敢な農民たちといっしょに泥の家に寝て戦争するために、ぼくが貨物船の最低料金の船室に雑魚寝して出発するつもりだ、といえど祖父は、それではわが家系の不幸な政治的人間よ、行つてこい！ と答えるだけでよかったのだ。そして、ぼくが、この冒険のために旅費をくれ、とつづけていいだせば、祖父は次のように反問してそれを拒否することができたはずである。

「スエズ狂よ、おまえは自分の冒険のために、わしのよ
うな反・冒険家のふところを狙つて、不公平ではないか

ね？」

ぼく自身、それがよくわかつていた。したがってぼくはスエズ戦争への義勇軍の会の第一回の集会で、議長にこの事情を訴えてみた。そのとき、傍で聴き耳をたてていた、会の最年少の関西の私立高校生、齋木犀吉が、ぼくに話しかけてきたのである。こうして、ぼくらの奇妙な友情関係が始つた。

「その明治の遺物の説得なら、おれが役にたつと思うよ、しかし、きみはラ・ロシュフーコーの模倣者のひとりがいつたモラルのことを忘れてたから、そういうことになつたんだぜ、そのモラルというのは年寄り若いうちに殺せ！ というんだ」と、いかにも関西なまりのある甲高い早口の標準語で、顔じゅうに一本の鬚も生えていないその少年はいつたのだった。

関西から上京して以来ずっと齋木犀吉は親戚の画家のアトリエの長椅子に着のみ着のまま眠っていたので、牀じゅうに一種の見まうがうことのない汚れがめだちはじめていたが、それでもかれの服装のオリジナルな性格には、ぼくの心をつかまえて掃きぶるものがあつた。まず概念的にいえば、このときすでに一メートル七十五センチ

ちもあつた大柄な少年は、ヴェルレエヌのスケッチのランボオと、そのころ地方の映画館や東京の場末の三流館で公開されていたフランス映画『肉体の悪魔』のジェラル・フィリップに似ていた。これは、その後かれと会うたびに感じたことだが、かれの大きい顔のなかの、とくに異常ではないが、どのような群衆のなかでもめだつにちがいない目鼻立ちは、その時どきに、じつに様々な人間の、それもきわめて個性的なタイプの容貌だというのが通説の他人の顔に似た。ジェームス・ディーンが自動車事故で死んだ前後、かれはこの近視の若いアメリカ人を思ひださせるやり方で憂わしげに眼をほそめ、額は髪でみじかく限って歩いていた。そして誰かれがかれのことを東洋人のなかでもっともジェームス・ディーンに似た顔だと批評した。それはまさに不可解な話だったが、かれに内密ながら、バラマウントだったカワナー・ブラザースだったか、ハリウッドの映画会社にそのむねを知らせてやった気違いさえたのである。結局、齋木犀吉に模倣あるいは演技の才能があつたということだろう、かれには映画館の暗闇でたちまちヒーローの特徴をつかみ、自分の大柄な造作の顔を可能ながざりそれにちかづ

けるべく整備する才能があつたわけだ。しかしかれは、映画会社にはいり、ニュー・フェイスとして映画に出たことがあるが、俳優としては成功しなかった。そのおもな原因は、ひとところかれに力を入れたプロデューサーによれば、かれの眼があまりに小さすぎたためだし、ぼくの観測では、かれの体が大きすぎて他の俳優の頭の上にいつもその顎をゆらゆらさせていたのと、かれの吃りがちの甲高い声が、日本の映画会社の青春映画に登場する、いかなる若きヒーローの性格ともマッチしなかったためだと思われる。齋木犀吉は、タフ・ガイのスターとなるためボクシングを練習し、四回戦ボーイとしてリングにあがったことさえあつた。それは、見こみちがいの苦杯をなめた韓国人のプロデューサーが身銭をきってすすめたことだったが、結局、齋木犀吉は、ボクシング・ジムでおぼえた技術でもって監督を殴りたおし、そして逆に助監督数名に殴りたおされて映画界から引退した。喧嘩の原因は、監督が齋木犀吉になにかつまらない台詞をいわせようとしたためだ。それは関西弁で、こんな風な威嚇の言葉だった、*「ワイはなあ、この辺で、ブイブイいわしとる男やねん、見そこないな！」*

さて、このようなタイプである斎木犀吉はぼくがかれと最初に会ったとき、灰色のブーツをはき、丸太のような黒いサージのズボン（裾がわれている、これは流行にかなり先んじたスタイルのズボンだった、その後、数年ぼくはたびたび、この形式のズボンの連中を見た）にくわえてネヴィ・ブルーの半外套を着こんでいた。この恰好の少年がナイル河流域で戦っている様子を空想すると、もちろんその滑稽さを笑ったあとにしても、いくらか痛ましい気分になる。このときまだ斎木犀吉には、手足が不均衡にのびすぎた、頭でっかちの、不器用そうな少年という、どうしても滑稽さをまぬがれない不利な年齢のなごりがあったものだ。同時に、このころからすでに斎木犀吉にはきわめて老成した人間のような説得力がそなわっていたことをつけくわえておかねばならない。

スエズ戦争への義勇軍の会は、その第一回の集会で、その冬のうちに横浜を発つことを決定したので、ぼくらは急がねばならなかった。ぼくと、ぼくのために祖父を説得してくれるはずの私立高校生、斎木犀吉は、その夜の十時半発の四国連絡の急行列車にのりこんで、ぼくの祖父が家をまもっている谷間の村へと出発した。もちろん

ん二人のための三等切符は学割を不正使用してぼくがいちどに二人分、自分の金で買ったものである。その後、斎木犀吉がいかに経済的な成功をしめしていたときにも、ぼくはほんのたまにしか、ぼくの分の切符、ぼくの分のコオフィの勘定その他をかれに払ってもらったことはない。そのやや一方的な依存様式が、そもそもこのときに始つたのだった。おたがいの威厳をいささかもそこなうことなく、このような金銭関係をもつことができる、という特技を良いものとしてぼくは斎木犀吉にみとめていた。一般に、二人の人間のあいだで、片方が他方に食事を二度つづけて奢るというようなことが、じつに容易に両者の威厳をそこなってしまうことがある。ぼくはこのようにして真摯な友情をうしない、人生を荒涼と感じている人間たちの幾組かを知っている。ともかくこういう意味では、斎木犀吉が二人組での冒険の絶好の伴侶だったことにまちがいない。

四国行きの三等車は東京を発つときから満員で、ぼくらは坐る場所がなかった。ぼくらは通路にならんで腰をおろし、見おくりにきた親戚の画家の娘から斎木犀吉がもらつたスコッチを飲んだ。その凄じい上等なウイスキ